

《アディーナ》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』(日本ロッシニー協会紀要)第19号(2001年5月発行)の拙稿「ロッシニー全作品事典(14)《アディーナ》」。その後何度か増補改訂しましたが、今回新たなヴァージョンとして日本ロッシニー協会HPに掲載します。(2015年3月再改訂)

I-25 アディーナ *Adina*¹

劇区分 1幕のファルサ (farsa in un atto [初版台本の記載は farça em 1 acto])

台本 ゲラルド・ベヴィラクワ・アルドブランディーニ (Gherardo Bevilacqua Aldobrandini, 1791-1845) が下記の原作を改作。単幕：全14景、イタリア語

原作 フェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865) の台本《カリフと女奴隷 (*Il califfo e la schiava*)》(フランチェスコ・パジーリの作曲で1819年8月21日にミラーノのスカラ座で初演される前に、アルドブランディーニが改作したと推測。解説参照)。

作曲年 1818年(4月半ば~7月の間と推測)

初演 1826年6月12日(月曜日)、リスボン、サン・カルロス劇場 (Theatro de São Carlos)

註：多くの文献が採用した6月22日が誤りであることは、全集版序文 p. XXXVII で明らかにされた。

人物 ① カリーフォ Il Califo (バス、E♭-g') ……バグダッドの僭主

註：従来の文献表記は Califfo で、これはイスラムの権力者の称号として使われるが、全集版はロッシニーの表記 Califo を採用し、劇中の発音が「カリーフォ」となる。なお、初版台本の人物表は O Califa。

② アディーナ Adina (ソプラノ、b♭'・b") ……セリーモの恋人。最後にカリーフォの娘と判明する

③ セリーモ Selimo (テノール、d'・d") ……アディーナを愛するアラブ人の若者

④ アリ Ali (テノール、c'・a") ……カリーフォの信任厚い部下

⑤ ムスタファ Mustafà (バス、E♭-g') ……後宮の庭師

他に、男声合唱とエキストラ (役の設定なし)

初演者 ① ジョヴァンニ・オラーツィオ・カルタジェノヴァ (Giovanni Orazio [出版台本では Joaõ Oracio] Cartagena, 1800-41)

② ルイージャ・ヴァレージ (Luigia [初版台本は Luiza] Valesi, ?-?)

③ ルイージ・ラヴァーリア (Luigi [初版台本は Luiz] Ravaglia, ?-?)

④ ガスパレ・マルティネッリ (Gaspere [初版台本は Gaspar] Martinelli, ?-?)

⑤ フィリッポ・スパーダ (Filippo [初版台本は Filipe] Spada, 1789c-1838)

管弦楽 2フルート/ピッコロ、2オーボエ、1イングリッシュ・ホルン、2クラリネット、2ファゴット、4ホルン、2トランペット、1トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、システル [シストリ。註]、弦楽合奏、レチタティーヴォ伴奏楽器

註：ロッシニーはシストリ (Sistri [鉄琴の一種]) をシステル (Sister) と表記することがある (例：《アルミーダ》)。

しかし《エルミオーネ》ではシストリをトライアングルと同義に用いており、《アディーナ》のそれがどちらを指すか不明。

演奏時間 約80分

自筆楽譜 ロッシニー財団、ペーザロ (第三者の作曲を含む。解説参照)

初版楽譜 Tito di Gio. Ricordi, Milano, 1855-59. (ピアノ伴奏譜初版)

全集版 I/25 (Fabrizio Della Seta 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 2000.)

構成 (全集版に基づく)

N.1 導入曲〈晴れやかに光り輝き *Splende sereno e fulgido*〉(セリーモ、ムスタファ、カリーフォ、合唱)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈後宮へ行き *Andate, e del Serraglio*〉(アリ、カリーフォ)

註：全集版の楽曲構成の冒頭語に誤植がある。

N.2 アディーナのカヴァティーナ〈幸運のイチゴ *Fragolette fortunate*〉(アディーナ)

N.3 合唱〈愛らしいアディーナ *Vezzosa Adina*〉(合唱)

- 合唱の後のレチタティーヴォ〈周りを見てごらん *Quanto d'intorno vedi*〉(アディーナ、セリーモ、ムスタファ、カリーフォ)
- N.4 アディーナとカリーフォの二重唱〈もしも私を嫌ってないなら、おお、わが愛しき人よ *Se non m'odii, o mio tesoro*〉(アディーナ、カリーフォ)
 - 二重唱の後のレチタティーヴォ〈ご主人様、どうしたのです *Che ti arresta o Signor?*〉(アリ、カリーフォ)
- N.5 カリーフォのアリア〈後宮の周囲を固めよ *D'intorno il Serraglio*〉(カリーフォ)
- N.6 シェーナ〈夜になった *S'alza la notte*〉とセリーモのアリア〈正義の神よ、私の抱く疑いを *Giusto ciel, che i dubbi miei*〉(セリーモ)
 - シェーナとアリアの後のレチタティーヴォ〈ああ！ ああ！ どうしたんだ？ *Ahi! ah! Che avvenne?*〉(セリーモ、ムスタファ)
- N.7 四重唱〈愛しい住処を離れ *Nel lasciarti, o caro albergo*〉(アディーナ、セリーモ、ムスタファ、カリーフォ)
 - 四重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ！ 恩知らずなアディーナ *Oh! sconoscente Adina*〉(アリ)
- N.8 アリのアリア〈まったく女というものは *Pur troppo la donna*〉(アリ)
 - アリアの後のレチタティーヴォ〈余の前からの *Sì, dalla mia presenza*〉(アディーナ、カリーフォ)
- N.9 アディーナのアリアとフィナーレ〈その麗しき目を開き *Apri i begli occhi al dì*〉(アディーナ、セリーモ、カリーフォ、合唱)

物語 (時の指定なし。場所はバグダッドのカリーフォの後宮)

後宮の庭。合唱(役どころの指定なし)がカリーフォとアディーナの婚礼を祝う。後宮で育ったアディーナを愛するセリーモは、彼女をカリーフォから取り戻すためにムスタファを買収し、庭師として後宮に入る手はずを整える。だが、再び祝いの合唱が歌われ、カリーフォがアディーナとの結婚を宣言するので、セリーモは彼女が自分を裏切ったと思い、愕然とする(N.1 導入曲)。カリーフォがアリに、「アディーナを恋するようになったのは、彼女が昔愛した女奴隷ゾーラに似ているから」と話していると、当人が現れるので慌ててその場を去る。

アディーナが幸運のイチゴに託し、揺れ動く乙女心を歌う(N.2 アディーナのカヴァティーナ)。トランペットの音に導かれ、合唱がアディーナを称える(N.3 合唱)。ムスタファはアディーナにセリーモが来ていると教え、現れたセリーモは、「今夜後宮の外に迎えの小舟を用意するので、それに乗って逃げなさい」と告げて去る。恋人が死んだと思っていたアディーナは、二人の男への愛に逡巡し、結婚式の日延期をカリーフォに願ひ出る。理由を尋ねても答えを得られず、カリーフォは当惑する(N.4 アディーナとカリーフォの二重唱)。アリが来て、カリーフォの様子に驚く。結婚式延期の話を知ったアリは、先ほどアディーナが召使と二人で話し込んでいたので怪しい、と吹き込む。それを聞いたカリーフォは、後宮の周囲の警護を命じ、アディーナへの不信をつのらせる(N.5 カリーフォのアリア)。

夜。川の支流に臨む後宮の近く。独り佇むセリーモがアディーナへの思いと不安で揺れている(N.6 シェーナとセリーモのアリア)。ムスタファが逃亡の手助けに現れる。足音がして身を隠すと、後宮からアディーナが忍び足で出てくる。再会したセリーモとアディーナは愛を確かめ合うが、大勢の兵士に包囲され、3人は死を覚悟する。現れたカリーフォはアディーナの不実をなじり、彼女がセリーモの命乞いをするとう怒りを爆発させ、セリーモとムスタファに斬首刑を宣告する。嘆きと怒りのうちに全員立ち去る(N.7 四重唱)。アリはアディーナの行状に呆れ、女の性を風刺する(N.8 アリのアリア)。

アディーナは再びカリーフォに赦しを請い、拒絶されたショックで失神する。驚いて駆け寄ったカリーフォは、彼女の身に付けている自分の肖像画を見つける。それが以前ゾーラへ贈った品であることから、カリーフォはアディーナが自分の娘と悟り、セリーモの命を助けに行く。やがて合唱の呼び掛けで目を覚ましたアディーナがセリーモの身を案じると、背後から彼に呼びとめられ、無事を喜ぶ。カリーフォから娘であることを告げられたアディーナは感謝を捧げ、皆の祝福を受ける(N.9 アディーナのアリアとフィナーレ)。

解説

【作品の成立】

25 作目の《アディーナ》は、ロッシーニがイタリア以外の劇場のために作曲した最初のオペラである。非公式な作品依頼は、リスボンのサン・カルロス劇場(Theatro de São Carlos)のコントラバス奏者ガエターノ・ペッツァーナ(Gaetano Pezzana,?)がロッシーニに宛てた書簡でなされた(1817年12月21日付)²。ペッツァーナはロッシーニと面識があったらしく、真の依頼者から最初の打診を委ねられたらしい。この依頼状は誤ってミラーノに送られ、12月27日の《ブルグントのアデライデ》初演のためローマに滞在中のロッシーニが転送された書簡

を手にしたのは、ナポリに戻った後の 1818 年 1 月と思われる。

その後の交渉は、ナポリ在住の銀行家でリスボンと繋がりのあるエマヌエッレ・ニェッコ (Emanuelle [またはエマヌエーレ Emanuele³⁾ Gnecco,?]) 伯爵との間で進められ、両者による正式契約書 (1818 年 4 月 7 日付) では《アディーナ (Adina)》と題された「ファルサ・セミセーリアまたはメロドラマ」の台本に 4 月 10 日から 2 ヶ月間に作曲すること、報酬 200 ミラーノ・ツェッキニー (540 ナポリ・ドゥカーティ) は 3 回の均等分割払いとし、台本が届いて作曲を開始したら三分の一、コンチェルタートの楽曲に着手したら三分の一、全曲を完成したら残り三分の一を支払うと明記されている⁴⁾。ニェッコとロッシーニの間で交わされたこの契約書と前記依頼状が《アディーナ》に関する現存ドキュメントのすべてであり、初演に至るまでの経過を詳らかにする資料は残されていない。

全集版の校訂者デッラ・セータはペッツァーナとニェッコが仲介者にすぎぬと考え、作品の真の依頼者を特定すべく調査を進め、リスボンのキンテラ男爵ホアキン・ペドロ (Joaquim Pedro barone di Quintela, 1801-69) の可能性が高いと結論したが、決定的証拠が無く現時点では推論の域を出ないとする⁵⁾。

台本作者ゲラルド・ベヴィラクワ・アルドブランディーニ (Gherardo Bevilacqua Aldobrandini, 1791-1845) の本業は画家・舞台美術家であるが、1819 年にはトットラの協力者も務めたのでアマチュア台本作家とも位置付けられる。従来の文献は《アディーナ》の原作をボワエルデュー作曲《バグダッドのカリフ (Le Calif de Bagdad)》(1800 年パリ初演) やマヌエル・ガルシア作曲《バグダッドのカリフ (Il Califfo di Bagdad)》(1813 年ナポリ初演) に求めたが、デッラ・セータはこれを否定した。また現代の複数のロッシーニ研究者は、アルドブランディーニがフェリーチェ・ロマーニの台本《カリフと女奴隷 (Il califfo e la schiava)》(フランチェスコ・バジエリ [Francesco Basili, 1767-1850] の作曲で 1819 年 8 月 21 日にミラーノのスカラ座初演) を改作したと推測するが、ロマーニ台本によるオペラの初演が《アディーナ》の契約から 1 年 4 ヶ月後であること、それに先立ってなぜロマーニ台本が第三者の手に渡ったかを合理的に説明できないため、デッラ・セータは断定を避けている。それでもこの二つの台本に関連があることは、テキストの比較で明らかにされている⁶⁾。

ロッシーニは 1818 年 4 月 7 日付の手紙で母に「リスボンのためのオペラを作曲するため約 3 ヶ月ボローニャに滞在します」と予告し⁷⁾、同月 15 日にナポリを発つとローマを経由してボローニャの両親の家に着いた。けれども本気で取り組むつもりはなく、複数の協力者の手を借りてこれを仕上げたことは後述する。完成時期は不明で、リスボンには総譜の写しがニェッコ経由、もしくはロッシーニの手で直接送られたらしく、11 月 10 日付の母への手紙に「ファルサのお金がぼくに支払われました」と報告している⁸⁾。だが、楽譜を入手した真の依頼者は上演を見送ってしまった。理由は定かでないが、序曲のない不完全な作品としてお蔵入りになった可能性がある。結果的に初演は 8 年後の 1826 年 6 月 12 日にサン・カルロス劇場で行なわれたが、当時のリスボンの新聞が上演批評を載せないで評価を知りえない (初演日の特定は当時の新聞の記述でなされた)⁹⁾。しかし、その後同地で再演されなかったことから成功しなかったものと思われる (リスボンでは 1815 年の《アルジェのイタリア女》と《タンクレーディ》を皮きりにロッシーニ作品が開始され、1820 年代には数多くの作品が人気を博していたので本作の出来の悪さが目立っても不思議はない)。

【特色】

作品の成立経緯でも判るように、《アディーナ》はロッシーニのオペラの中でも異例の作られ方がされている。そもそも彼は若き日にヴェネツィアで発表した五つのファルサを最後にこのジャンルから手を引いており、注文がなければファルサの作曲はあり得なかった。初演する都市と劇場、初演歌手に関する知識がないままオペラを書くのもロッシーニにとって最初で最後であり、そのことは《アディーナ》の音楽的性格だけでなく完成度にも大きな影響を及ぼしている。本作が彼の全 39 のオペラで最も靈感を欠くことは明白な事実であり、ひと言でいえば凡作である。

導入曲〈晴れやかに光り輝き (Splende sereno e fulgido)〉(第 1 曲) は冒頭合唱から常套的で、全体に旧作のモチーフと手法の使い回しが感じられる。序曲の欠如も、当時のオペラ・ブッフアやファルサの常識から言えば問題にされて当然である (ロッシーニは旧作の序曲を演奏すればいいと考えたようだが、楽曲を指定して写譜を送ることはしなかった)。アディーナのカヴァティーナ〈幸運のイチゴ (Fragolette fortunate)〉(第 2 曲) も旧作の素材の寄せ集めといった感じで新鮮味が欠き、後半部のアジリタのパッセージも定型的に過ぎる。こうした評価は、多かれ少なかれすべてのナンバーに共通する。

実は自筆楽譜にはロッシーニ以外に 4 人の筆跡があり、その一人はロッシーニの父ジュゼッペである。九つあるナンバーのうちロッシーニの完全な書き下ろしは N.1、N.7、N.9 の 3 曲のみで、前記アディーナのカヴァティーナ (第 2 曲) は最初の 18 小節のみ真筆で書かれ、残りは不詳の協力者が完成させている (音楽について何らかの

指示をした可能性があり、出来はそれなりに良い)。旧作からの転用も3曲あり、いずれも《シジスモンド》(1814年)の第2幕からそのまま写譜され、合唱〈愛らしいアディーナ (*Vezzosa Adina*) (第3曲)の原曲は《シジスモンド》の合唱曲〈アルディミラ万歳 (*Viva Aldimira*)〉、シェーナ〈夜になった (*S'alza la notte*)〉とセリーモのアリア〈正義の神よ、私の抱く疑いを (*Giusto ciel, che i dubbi miei*)〉(第6曲)はラディスラオのシェーナ〈みじめな私! (*Misero me!*)〉とアリア〈正義の神よ、あなたは私の苦悩をご存知です (*Giusto ciel, che i mali miei*)〉、アリのアリア〈まったく女というものは (*Pur troppo la donna*)〉(第8曲)はアナジルダのロンド〈幸せを夢見ていました (*Sognava contenti*)〉から採られている。ここでの転用は単なる移し替えにすぎないので、《アディーナ》の音楽として論評するわけにはいかない(《シジスモンド》の自筆楽譜から父ジュゼッペと二人の筆写者が写して歌詞を書き込んだだけで、ロッシーニによる新たな関与は無い)。

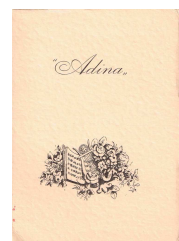
残るアディーナとカーリーフォの二重唱〈もしも私を嫌ってないなら、おお、わが愛しき人よ (*Se non m'odii, o mio tesoro*)〉(第4曲)とカーリーフォのアリア〈後宮の周囲を固めよ (*D'intorno il Serraglio*)〉(第5曲)は同一の不詳の協力者(第2曲の補筆完成者)による作曲である。こうした作られ方から言えば、本作はロッシーニが最も手を抜いたオペラであり、書き下ろしの3曲——導入曲(第1曲)、四重唱〈愛しい住処を離れ (*Nel lasciarti, o caro albergo*)〉(第7曲)、アディーナのアリアとフィナーレ〈その麗しき目を開き (*Apri i begli occhi al dì*)〉(第9曲)も精彩を欠き、スタイルが旧弊である。当然のことながら声楽的にも面白味が乏しい。ヒロインのアディーナの音域はb^b-b²で、最高音への立ち上げは常にヴォラティーナを使う一つのパターンしか適用していない。アジリタも典型的であることから、ロッシーニが凡庸なソプラノ歌手を想定したのは明らかである。実はペッツァーナは最初の依頼状の中で、予定される主演歌手(不詳)は「ソプラノの声域はすべて歌えるが、彼女に好ましい音域は[ソプラノ記号の]第一線ド(c¹)から五線の上のファ(f²)です」と釘を指していたのである。そのためロッシーニはアディーナの基本旋律の上限をg²とし、b²のアクートへの立ち上げもヴォラティーナを適用して容易にして華麗な歌唱をフィナーレに集中させ、そこで彼女の限界と思われる長く引き伸ばすa²と、アクートb²を使っている。

それゆえ初演歌手の能力や個性、声楽的長所を一切知らずに中庸の歌い手を想定した結果、凡庸になってしまったのである。転用楽曲が1814年の《シジスモンド》から採られたことでも、音楽的に後退した印象を拭えない。この作品がロッシーニのファルサで唯一合唱を持つのも、あらかじめ「合唱付き」と依頼状で求められたためである。ロッシーニはリスボンを辺境の地とでも蔑視したかのように、安易な方法で《アディーナ》を完成させた。しかし、作品の依頼者がそれを感じ取れぬはずはない。初演が見送られた真の理由も、そこにあるのではなかろうか。

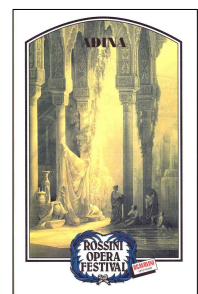
【上演史】

前記のように、初演は作曲から8年後の1826年6月12日にリスボンのサン・カルロス劇場で行なわれたが、同地では再演されずに終わり、19世紀の再演は1828年2月14日リオ・デ・ジャネイロのサン・ペドロ劇場が唯一である(《グラナダ大公 (*O Grão Duque Granada*)》と題して上演)。ちなみにサン・ペドロ劇場は1813年10月12日に開場して1824年3月25日に火災で閉鎖され、1826年7月22日にロッシーニ《タンクレーディ》で再開場したばかりであった¹⁰。ブラジルは1822年にポルトガルから独立していたが、当時まだ旧宗主国の影響が強かったため、上演作品の候補に楽譜がポルトガルから送られたのであろう。

20世紀の復活上演は、リオ・デ・ジャネイロ再演から135年後の1963年9月20日にシエナのキジアーナ音楽祭(アカカデーミア・ムジカーレ・キジャーナ)で行なわれた(リンノヴァーティ劇場。上演譜は作曲家ヴィート・フラッツィ[Vito Frazzi, 1888-1975]が作成)。同年ペーザロでも同じ上演グループが公演を行ない、5年後の1968年にはオックスフォードでイギリス初演も行われた。その後1970年代にエヴァ・リッチョーリ・オレッキア(Eva Riccioli Orecchia)がオトス社(Edizioni Musicali Otos)の委託でレンタル総譜と出版用のピアノ伴奏譜を作成し(1969年刊)、そのエディションを用いて1981年ボローニャ、1991年9月28日にローマのRAIオーディトリウム(演奏会形式)、翌1992年5月8~10日に同地のヴァッレ劇場で上演された。同月16日にはリューゲンのロッシーニ音楽祭(Rossini Opernfestival Rügen)でドイツ語訳の初演も行われた。ロッシーニ財団の批判校訂版による最初の上演は1999年8月7日、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでなされた(オーディトリウム・ペドロッティ。指揮:イヴ・アベル、アディーナ:アレクサンドリーナ・ペンダチャンスカ)。



1963年復活上演
台本(筆者所蔵)



1999年ROFプログラム(筆者所蔵)

推薦ディスク

推薦に値するはまだ無い。既発売はオトス版を用いたアルド・タルケッティ指揮 (Ruggenti RUS551001.2 [2CD]) とヴィルヘルム・ケイテル指揮 (Artenova 74321 67517 2 [2CD])、ドイツ語版による演奏 (Canterino CNT1082[1CD]) のみ。

¹ 題名を《アディーナ、またはバグダッドの太守 (*Adina, ossia Il califfo di Bagdad*)》とするのは誤り。

² 書簡全文は Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.I., 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, 1992., pp.234-235.

³ 契約書の署名と全集版は Emanuele (エマヌエッレ)、*Lettere e Documenti* は Emanuele (エマヌエーレ) と表記。

⁴ リスボンから支払われるのではなく、オペラを委嘱した人物の代理人でナポリ在住のニエッコが作曲の進行状況に照らして支払うとの意味に解釈できる。本契約書全文は *Lettere e Documenti*, vol.I., pp.274-276. 及び全集版序文 pp.XXII-XXIII. 参照。

⁵ 少なくとも《アディーナ》の委嘱をリスボン市とする従来の文献は誤り (公的な委嘱や介在を示す資料は一切存在しない)。

⁶ これに関する議論とテキスト比較については全集版序文 pp.XXVII-XXXI を参照されたい。

⁷ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.IIIa., *Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.206-207. [書簡 IIIa.112]

⁸ *Lettere e documenti*, IIIa., pp.219-230. [書簡 IIIa.119]

⁹ 全集版《アディーナ》序文 pp.XXXVI-XXXVIII.

¹⁰ Ibid., p.XXXVIII. 及び同 n.86.